
マルクトマルコ外伝 魔法少女ジュリア

明 綾乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マルクトマルコ外伝 魔法少女ジュリア

【Nコード】

N2655L

【作者名】

明 綾乃

【あらすじ】

これは、王国と共に有り同時に対を成す威光の魔法使いの物語。魔法使いジュリア＝F＝ヘンデルの歩んで来た経緯。ウェルダ教団によって絡まった因執、闇の都と化した銅鐸堂と対を成す街の存在、グラディ＝マクマートリーの研究…起こるべくして起こった始まりへと歩む魔法使いの物語。

第一幕 ウエルダ教団

魔術の知識は異常の世界を映し出す。

その力は物体の存在根底を覆し、使用者さえも神の定めた『意味』に逆らわなければならない。

いずれその先に破滅があると解つていようと、人間は何故魔術の力を求めるのか…

奇跡を望む人間の性か、死を覚悟して魔の者に抗う意思の現れかそれが何を目指すものであれ、それは異常の理なのである。

地下深くに、長く続く廊下があつた。

『ウエルダ教団』…不死の秘法を異常なまでに信仰し、研究を進める科学宗教の蔓延する現代には珍しいとされる魔術組織、その総本山がこの場所…この地下施設だつた。

そこを歩く男に付き添つて歩く銀髪の少女、彼女は物心ついた頃からこの地下世界で育つてきた。

彼女には、この地下施設そのものが世界だつた。

「『おとーさま』、おとーさま」

少女が嬉しそうに繰り返す言葉に、少女を先導する男は眉をひそめて問う。

「…何だ、その呼び方は…？」

「信者の人がね、教えてくれたの

自分を育ててくれる大事な人を、『おとーさん』って呼ぶんだって」
少女の言葉に、男は「やれやれ…」とこめかみを押さえて頭を振る。

「ジュリア、それは人間同士の関係だ…忘れなさい」

「えっ……………でも……………」

少女、ジュリアの反論を切って、男は続ける。

「ジュリア、我々は教団の頂きに立ち…この世の神になり替わる新たな神となる存在だ

信者には悪いが、『ニンゲン』の下らない人間関係を我々にあてはめるなど在于てはならない事だ

私は神となり、私が駄目になったその時はジュリアが後を継いで神となる…それだけだ」

男はそう言って手を翻すと、ジュリアの頭を愛おしそうに撫でる。

「期待しているのだ、俗世に染まるな…ジュリア=F=ヘンデル」

「……………はい、教祖様……………」

ジュリアは悲しそうに、本当に悲しそうに、頭を垂れた。

しかし、再び男に撫でて貰うとご機嫌そうに「にゃあ……………」と鳴いた。

それは『物語の始まり』から数えること4年前、彼女がこの地下施設から連れ出されるほんの少しの事だった。

それも、語り手の観測から外れた『開けられなかった箱の中身の世界』

箱の中の猫は、観測された出会いの時を待ちながら…待っていることにすら気付かないまま
孤独にただ生かされていた。

「魔術結社の掃討、今時珍しい指令も来たものだ…そうは思はないかね？」

ところ変わって、イギリスのさる屋敷のデスクに座る青年は金色の蠟印を押された指令書を片手に呟く。

ツンツンに跳ねた茶色い髪に、周囲の白人たちに比べて若干肌の色がある東洋系の人種

おおよその国この屋敷の雰囲気合わない青年は、隣に立つ屈強な黒人の大男にその指令所を渡す。

「本当、19世紀の無茶のせいで今時魔術師も少数精鋭になってるというのに

とうとう『市国』の上層部は残り少ない魔術師の人数管理すらできなくなつたのかしら？」

部屋の端にくつろぐ赤毛の女性が、何故か竹ぼうきを磨きながら問う。

「アルジェナ、問題発言だ」

指令所を持った大男が、アルジェナと呼ばれた赤毛の女性に短く告げる。

「あら、こちらら歴史あるペイガン学派の魔術師としてあいつらに
るくな思い出がなくなつてね
貴方もそうでしょう、口力？」

口力と呼ばれた大男は「そういう、問題ではない」と、眉をひそめ
てサングラス越しにアルジェナを睨む。

険悪な二人を取り持つように、デスクに座る青年は両手を出して二
人に制止をかけた。

「待て待て待て、そもそも此処が何処なのかをよく考えてくれ
団長の俺の前で堂々と喧嘩するなお前ら」

「……………すみません（、）団長」

二人の謝罪に納得したように、青年はデスクに肘をついて事の詳し
い情報を語る。

「何にせよ、此処は壊滅さなきやならないんだがね

度重なる人体実験、教団員に対する無節操な魔術知識譲渡、死者蘇
生にそのの堂々としたパフォーマンス

これ以上人間を『魔術』にし続けられいずれ騎士団でも手に負えな
くなる…そう『市国』は踏んだんだよ。」

「典型的な、都市魔術」

「魔術化して蘇生した人間を媒介に、地域一帯の『常識』を支配す
る…神作りでもする気？」

青年は、デスクから立ち上がって号令をかける。

「十字教薔薇十字騎士団統括団長、下院^{クロウナー} K 無明が命じる

3日後以内に、ウエルダ教団本部をあぶりだして魔術の根幹を焼き払え」

青年：かつて無明 下院と名乗っていた青年は、躊躇も迷いもなく屋敷内の騎士団員全員に指令を通達した。

何処から聞いていたのだろうか、屋敷の至る場所より下院の紡ぐ言葉と同じ声がある。

「『不当の真実を叩き切り刻み捻じ伏せよ、不当の力に不当の力で以て、抗い壊し怖して潰せ

魔術に遺恨を抱き、魔術に寄って遺恨を埋める矛盾の魔術師達よ
薔薇の多重法円と、真理の十字の下に今こそ名乗りを上げよ

我ら十字教薔薇十字騎士団！！！！！！」

言い終わると同時に、下院は手に持った刃のない剣を、アルジェナは箒の取っ手を、口力は黄金のナイフを、それぞれ机に叩きつけた。

第二幕 教団 強襲

魔術様式に合わせるために中世的な様式を配した神殿でも今日の防衛のためには近代的な装備も配置せざるを得ないのだという。

ウェルダ教団本部：『神殿』にも、機械的なアラートが鳴り響き霊装と機関銃で武装した教団の僧兵たちが防衛ラインを敷いていたしかし、例えどれだけ武装しようとも、魔術でも魔法でも化学でもそれぞれ違いがあるとも…
使う兵器と、それを使う者の熟練度の違いはどうしても覆すことができないのだろう。

「無粋だわ、吐き気がする」

『神殿』に、露出度の高い扇情的な霊装と竹箒のみで侵入した魔術師の一薙ぎで、それはもう確定していた。

魔女アルジェナ、ペイガン学派を伝える魔術結社『キユベレクラフター魔女宗の後継者』の元巫女

彼女の保有する魔力は魔法使いにこそ劣れど

出力のみでいえば、事実上のどの魔法使いでさえ敵う者は居ない…幻影と破壊の魔女。

片や、ウェルダ教団の魔術師たちはその殆どがただの一般人。

まして、昨日今日…敵対勢力による教団支部攻撃が始まってからようやく攻勢魔術や銃器の扱いの基礎を始めたという者ばかりだった。その結果は歴然かつ当然かつ圧倒的かつ暴力的…それ以前に、一方的だった。

タンと、アルジェナが箒を逆さにして地面を叩くと…
急に重力が下ではない、横…教団の出口に向いた。

「「「おつよ。「「「」

彼らは世界の過半数の進行を支配する『正義』の使者。

あるいは、ただ復讐や我欲に燃えて他の薪を燃やす『悪』なる焰の巣窟。

十字教薔薇十字騎士団は、正門から堂々とウエルダ教団へと侵攻を開始した。

「ジュリア様っ！！こちらへ…」

襲撃の報からすぐに、ジュリアは教団からの脱出ルートを進んでいた。

「……」

「つく、一体何故此処の所在がばれたんだ…！！」

教団の存在そのものは知れても可笑しくはない、寧ろ宗教と言うものは知れられなければ意味がないのだから。

しかし、その中でもその本部であるこの地下施設の隠蔽そのものは完璧の筈だった…それなのに何故この位置が特定されたのか…

爆発が起き、ジュリア以外の今日団員達が薙ぎ払われていく。

「退路の占拠は完了、と」

そう言つて、瓦礫の中から現れる栗色のツンツン頭の青年、彼が教団を経つた今壊滅させんとしている組織…

薔薇十字騎士団の一員なのだという事は理解できた

「子供か…その教団員の娘か、悪い事をした…っ！！？」

ジュリアが振るった魔術剣を、青年は片手で受け止めた。

「娘じゃない…ジュリアは、教祖様の…娘じゃないっ！！」

叫んだジュリアは教団で必要最低限身につけた体術を駆使して、青年に斬りかかる。

それは、目の前で教団員を殺された怒りではない

一人ひとり顔なんて覚えていなくてもない、自分に逢うニンゲンなんて…ただ彼の道具としての自分を手入れに来る雑務係で自分をジュリアという一個人として扱ってくれる人は誰も居ないから。

ジュリアが怒気を露わにしたのは、自分が『誰かの娘』であるという青年の勘違い。

「ああああああっ！！」「止すんだジュリ！！」

剣を構えて青年に突進するジュリアの心に、突如として制止の音が響く。

「邪魔しないでメタトロン！」

と、叫ぶジュリアの蹴りが青年の脇腹に刺さり、青年は一瞬苦悶の表情を表す。

しかし、一瞬の後にはその足を掴みグルンと青年はジュリアを組み伏せた。

ジュリアは、泣きながら叫ぶ。

「ジュリアは…じゅりあはっ…ニンゲンじゃないよっ
教団の道具だもの、ずっと此処に居る…教祖様の代わりだもの…
っ」

胸の内を明かして泣き伏すジュリアを見て青年は…

「メタトロン…天使を模した上位自己ハイアーセルフを持っているのか…
キミは、魔法使い…それも未覚醒かね？」

青年の問いに「……」と、ジュリアは無言で応える。
すると青年は黙り込み、一瞬考えた後にジュリアに問う。

「二回問う…今、ここで死ぬのを望むか」

そう言つて青年の延ばす手にジュリアの身は縮こまるが、その手は
ジュリアの頭を優しく撫でた。

「それとも、この無明・下院と外の世界へ出るか…だ」

「え……」

ジュリアは青年の差し伸べた手を、思わず凝視した。

青年…下院は続ける。

「来るのなら、お前が知らないものをすべて教えてやる
外の事、人間である事、外の常識、感情も…」

翡翠のような深緑の瞳は、誰かに向ける殺意だけではない…後悔、
そして決心で確かに輝いて見えた。

「じゃあ……」

ジュリアは剣を置き

「愛も、教えてくれるの？」

ジュリアの問いに、青年は頷いた。

「教祖様、薔薇十字騎士団の攻撃が予想以上に激しい以上、ここは撤退せざるを得ないのでは……」

「撤退？」

ならばどこへ撤退しようというのだ？」

教祖の問いに、撤退を提案した教団員はしり込みする。

「都市魔術の根幹はここだ、もう少し……初めに魔術の施行位置を吟味してさえいれば、違う未来もあったのだろうが……
今となつては愚考か、ならば今ここで我らの悲願を達成しようではないか」

教祖はせり上がった台座に手を翳し、魔術を起動させる。

「教祖様、それでは……」

「神に、なられるおつもりですか？」

「現代に生きる魔術組織として、その力は魔女狩りの時代を大きく上回ると知れ

薔薇十字騎士団……いや、神の意志よ……っ……!」

第三幕 教祖 知恵の魔法使い

「おお、愚かなる神よ、我々はいくらでも貴方に弓を引こう

私は全ての光と世界に復讐する者であり…であるが故に、私と志を同じくする智天使の血肉を喰らったのだから」

祭壇の上で両手を天に掲げ、男は嗤っていた。

それは神を冒瀆する自らの愚かさを嗤っていたのか

あるいはこれからその元へ赴き自ら殺さんとする神そのものを嗤っているのか

それは今となつては誰にもわからない、それは男をその時やっと思つけた下院自身も深く知ろうとはしないだろう。

「素晴らしい製圧力だ、流石は総ての魔法の仇敵、薔薇十字に仕える勇者達よ」

男：ウェルダ教教祖もふと祭壇へ続く階段を見下ろして、下院の姿を確認すると袖に隠れた両手から光を放つ。

「薔薇十字騎士団もあくまで復讐者の集まり、お前と同じく総ての幻想と現実嫌気がさし

暴力と攻性魔術によってそれを他者にぶつけるしかない愚昧かつ蒙昧な人種と言える。

しかしそれはお前も同じだ、その対象が魔術師^{ひと}であれ、神であれ…」

下院はゆっくりと階段を一步步つ昇りながら教祖の言葉に返して言葉を重ねて行く。

「俺とお前は同じ人種なんだろう？ウェルダ・エアリアルマスター」

「その呼び名も、もうすぐこの世界から失われよう…私はこれから人間の肉体を捨て多神教の指すところの神と呼ばれる存在へと至った後、『あちら』の世界で戦争を起こすそして然るべき条件さえ満たせば、彼の唯一神に裁きを下すことも可能となるだろう」

ウエルダの言葉を聞き、下院はそれが彼の妄言などではないことを確信する…しかし

「何故そう言い切れる？人類史上あちらに行ってこれた者の中で誰か一人でもそんな事が出来たのであればもうとくに世の中の仕組みは変わっているはずだ」

下院はあえてその計画を一笑に伏す形で嘲笑う、彼の成さんとしていることは解る

しかしその動機が解らない、下院にとってはそれが不可解で不気味なのである。

教祖がそんな手に引っかけられるほど愚かではない事も下院は既に分かっている。

他の騎士団員が此処までたどり着けないのも一足先に地下施設の裏口に回って破壊活動を行っていただけにすぎない。

その他のルートは儀式が始まった瞬間には既に閉鎖、更には複雑な距離増幅結界が作動してしまっている。

―事実上の一騎打ち、果たしてこれはこの男の思惑通りなのか…―

「高い…」

教祖の言葉に、下院は耳を傾ける。

「既存の神の居場所は余りにも高い、それが故に、我々人類の受けた『意味』」

自覚なき運命に縛られた存在のみが存在するこの世界になってしまっているのではないか…そう思ったのだよ

例えばこの世に存在する死さえも意味があるものであるならば

果たして、己の成すべきことを成し切れずに非業の死を遂げて行った人間はどうする

そして世界に絶望し、見飽いて、昇華した魂は私リザレクションの手を以ってしても救う事は出来ぬ

何と残酷で、絶対的な神の理だとは思はないか…！」

ふ…と笑ったのは双方同時だった。

「成程…ウエルダ教は元々教祖を神と崇め、その信仰の力で『死メトセラの超越レイション』を行おうと研究をしている組織と聞いていた

納得がいった、つまりはお前のつまらないエゴの為に教団はわざわざ十字教に喧嘩を売ったのか

合点がいった、道理でこの組織はいつもこいつも戦闘慣れどころかやる気と言うものがお前以外空回りしているわけだ

もう少し抵抗があってもいいと思っていたものだが、そう言うことか」

「いずれ皆蘇らせよう…神のように気紛れなどではない、信仰と言う己の利益のみで求めるものでもない

総ての人間が蘇り、そして死と言う概念も消滅する…そこにあるのはこの私と言う神の管理する楽園エデンだ」

カツっ！ と、強い足取りで下院は祭壇の最上階に立った。

その表情はつい一瞬前までの穏やかな物ではなく、明らかな敵意を

教祖に向けた復讐者の目だ。

「呆れたものだね、ウェルダ・エアリアルマスター」

「…何？」

下院はどさりと手に持ったトランクを落とす。

「先ほども言ったがそれはお前のエゴだよウェルダ、そして強い破壊願望に過ぎない

だいたい神が一人を救って何になる、神にそんな力とやる気があったところでそれに甘んじて生きるのは俺は御免だ

魔術師が…それ以前に人間と言うのはそう言う生き物だと、お前は誰よりも知っている筈なのにな」

「なればこそ、我が手で運命を…せめて高みから神を蹴落とすまでも」

教祖が言いかけたところで、下院はジャリン！と、トランクから取り出した剣で教祖へと斬りかかり

教祖はその両袖の光を剣のように伸ばして、両手の光剣で下院の剣を受け止めた。

「誰もが救われ、誰もが幸せになる光景が見たいならば

神は世界など作らずに一編の物語でも書けば良いんだ、だが俺たちは神の駒でもキャラクターでもない」

「ふふははは！！薔薇十字の騎士よ、お前は本当に私と同じであるようだ

ならばもう言葉はいらない、どちらが正しいかは互いの魔導によっ

て決めようではないか

正義が勝つ？違う、勝ったものが正しい理を持つ者だ！！」

教祖は光剣をレーザーのように下院に向けて放つが、下院はとっさに剣でそれを反らして避け互いに距離をとる。

続けて教祖の両袖には再び光が灯り光剣が姿を現す、そして其れを祭壇の間の壁に向けて放つ。

祭壇の間は広い、物理法則を無視して地下に開けられた大空洞に無理やりピラミッドを詰め込んだような外観となっている…

その材質は下院とてうかがい知ることなど出来なかったが、恐らくは『そう言う材質』なのだ…下院は即座にトランクから独鉗を5つ取りだして上空に放り投げる。

二本の光剣は反射して勢いを増しながら祭壇の間中を縦横無尽に飛び回った、

「物理結界は邪道だと思うが、そうは言ってられないかね…！！！」

禁^{キン}！！と、五本の独鉗の先端が下院の周囲で規則正しく並び、二重の正四面体となって下院の身を護る。

しかし光剣は既に文字通り光の速さで祭壇の間中を飛び回っており、その速度のまま結界に衝突して強い衝撃を下院に与える。

其れに加えて、眼前には新たに生み出した光剣を振り被る教祖の姿…

下院はトランクから今度は二本の蛮刀を取り出し…

「ふんっ！！」「でえや！！！」

その二本で教祖の光剣と飛び回る光剣の二本を受け留めた。そして…パァン！！と、光剣は総て弾け飛んだ。

「!?!?…くっ…恐ろしいな、その剣…贋作か?」

「ああ、良くできた贋作、ティソナとコッラーダ

異教を狩るもの、元々はその異教の武器だが使い方を誤らなければ
違う教派の術式を粉々に分解する」

二つの剣を宙に浮かせて、下院はポケットの中から長い長いチエ
ーンを取り出す。

> i 9 0 5 5 — 5 1 8 <

「神を名乗り、神にさえも本気で戦争しようって相手に出し惜しみ
する気はない

たった二人の魔法使いを助けられなかったときに俺は誓っていた
神の盾であれと、神すら叩き伏す盾であれと!

救えなかった、あの女に救いのない未来を用意してしまった責任を
果たせと!!

故に、俺はお前も容赦なく打ち倒す、良いなウェルダ・エアリアル
マスター!!!!!!」

「出し惜しみ?する必要はない、私も神の最強の盾である貴様に油
断などもつてのほかだと思っている

ならば見せつくすしかないだろう、『知恵』^{コクマー}の魔法使いである私の
力、説くと知るがいい!!

下院・クロウリー・無明!!!!!!」

下院の蛮刀と教祖の光剣が交差し、次々と火花が上がって行く。

知恵の魔法は他の魔法とは異なり、使用者に大いなる円環の知恵

…観測された魔術センスをもたらすものである。

祭壇を構成する術式が魔法でない以上は下院でも勝てない相手で
はない…しかし

下院が懷から放った鎖、幻想を現実を重ねる召喚魔術によって呼ば出された鉄竜を教祖はその片手の一振りで凌いだ。

「自らも魔法と化していたか、それがお前の出した答えか!!」

「これは手順であり戒めだ、私は失敗を許されてなどいない…私の後にはもう一人の魔法使いを…ジュリアを置いている

バックアップにしてもジュリアは覚醒すら済ませていない、だからこそ…私は自らの手で神を屠る!!」

神に敵対する覚悟を持った二人の殺陣は続き、やがて下院の剣筋が鈍って行く。

魔法と魔術…それも魔法と化し幻想種、神に近い存在となった教祖に体力が追い付くわけなどない。

ましてや下院が得意とする召喚魔術は人間としての魔法使いには有効だが、神に敗れる運命にある竜で神に勝てる道理はない。

片膝をついた下院に、教祖は語りかける。

「薔薇十字の若き騎士団長よ、これで最後だ…」

「…一つ、聞きたい事がある」

それで尚コッラダを向ける下院に、教祖は光剣を向けながらもその動きを留める。

「何かを殺す事によって得られる未来があるなら…その先に世界の望むものが何かあるとするならば
罪を背負ってでも、かなえなければならぬ事なのか？」

「これは君の言う通り私のエゴだ、どれだけ取り繕おうが
…それに罪は罪だ、許される事ではないだろう
私の手で、罪を背負った先に…樂園があるとするならば、私の手で
それを成そう」

下院はコッラーダを手放し、祭壇の間に乾いた金属音が響く。

「合点がいった…」

それでも下院の視線は教祖を貫いていた。

「その罪、俺が背負おう」

下院の手には、刃のない剣が握られていた。

教祖がその剣を認識し、驚愕に目を見開いた時には…勝負はもう
ついていた。

「ラハット・ハヘレヴ・ハミトウハペヘット…本物の、智天使の剣が
お前が犠牲にしているのは、お前の対に巻き込まれるものではなく
…お前自身だったという事が…」

教祖の軀には幾筋もの火の線が上がっていた。

それは恐らく、下院の剣の効果なのだろう…節理の存在しない魔
術で総ての魔術回路を焼き切られた痛みを内臓に感じながら、教祖
は祭壇を下りて行く…

祭壇の最下層には、教祖を見上げるジュリアの姿があった。

「私は…見ての通り、奴により消される……。
故に神化はお前に任せる。私に代わって…」

ジュリアがそう言っただけで、教祖を留めようとした時にはもう遅い、祭壇の間の内壁を満たす程の光剣の一つがチュン……とジュリアの足元に当たり反射して天上へと飛んで行く。

やがて二つ目、三つ目……やがて数百……やがて総ての光剣が一斉にジュリアと下院へ降り注いだ。

「ブルンツヴィークの魔剣よ……俺たちを護れ……！」

「無駄だ、貴殿の作る贗作ではこの『魔法』は防ぎきれないさあ降り注げ、『雷光の万華鏡』……！」

下院はなりふりかまわず祭壇から飛び降り、ジュリアの身をかわす為あらかじめ持ってきていた魔術の外套をかぶせる。

教祖の身のみをすり抜けて魔力の塊は絶えず降り注ぐ、彼のいうと折りそのすべてを防ぐことは不可能だった。

「つぐ……！」

ブルンツヴィークの守護魔剣、ティソナ・コッラーダ、三つの魔剣を用いてもその質量をすべてカバーできず

ジュリアをその隙間からカバーするようにその身で魔力を受け止める。

「団長さん……っ……！」

「くそ、そろそろ魔力も限界か……切り札で仕留めなかったのがまずかったかね……」

下院のこめかみから血が滴る、それは教祖の放った魔力によるものではなく自身の魔力不足の所為である。

ラハット・ハヘレブ・ハミトウハペヘットは下院の奥の手であると同時に多くの魔力を喰う諸刃の剣であった。

しかし今こうして教祖が倒れず、残る力を『雷光の万華鏡』の起動に当てられたのは下院の慈悲によるものだった。

「何故私を殺さなかった、そうすれば今こうして私の最後の足掻きを食らわずに住んだものを…」

「殺すことに躊躇したんじゃない…この子に、ジュリアに会う機会を残しただけだ」

俺は所詮偽善者だ、これも当然の報いだろっ」

教祖はそれをあらん限りに下院を嘲笑った。

「ふははははは！…ならば君は私の手によって共に消えるというわけか！…！」

ジュリアに世界を教えることもなく、愛も教えることなく！…！」

「死なせたりは…しない！…！」

その時、ジュリアに変化が生じた。

被せられた外套がパキパキパキ…と、音を立てて光に分解されていく…

「これは…威光…ケテル…威光の魔法か…！？」

そして分解された外套は両腕を翻したジュリアに正しく着直される形で再構成される。

それはもはや贗作ではなく、伝説にあるフレイア魔女神の外套そのもの

下院はジュリアにとってはじめて知った外の世界そのものの化身

である。

いまだ愛すら知らないジュリアにとってそれは何物にも変えがたいものであり、その存在の死は

今まさに終わろうとしている教団と運命を共にすることを示す。

ジュリアは本能的に、大いなる円環から流れてくる言葉を紡ぐ。

「主よ、憐れみたまえ

預言の権能に記された1番の白色球たる王権によって、奇跡は遍くまほう精神と意思によって顕現せり

故に片割れにして最後の剣メタトロン、ここに降りて汝に祈る者を守護する事を誓いたまえ」

ジュリアの全身から目を覆わんばかりの光が溢れ、祭壇の間を包み込む。

光はその中に溶かしていくように、遅い来る光剣を分解させていき…やがてすべてが飲み込まれていった。

「ねえ、教祖様…貴方にはとても嬉しくない事かもしれない…でも、私…自分で決められたんだよ

誰かに教えられることでさえ、生きることですえずっと教祖様に…教団の皆にしてもらった私が…」

「…私のバックアップにもなれない、出来損ないの魔法使い（にんぎょう）が何を言うか！！！」

教祖は再び祭壇のスイッチに手を置き、ありったけの魔力を注入する。

再び祭壇の間に無数の知恵の光剣が灯る、しかし体中の魔力回路を焼ききられ、奥の手を一度使った教祖は

下院と同じ、否、それ以上に多くの箇所から出血する。

そして再び飛び交い始めた光剣もすべて、いつの間にか切り分けられて空中に四散した。

「ジュリに手を出すことは、私が許さない」

凜とした女性の声を、銀色の剣が発した。

ジュリアの手に握られた、剣先のない長方形の刀身の剣…ある国の王冠を現すとされる威光^{カーテナ}の剣。

「教祖様、貴方のことが私は好きでした…ずっと伝えられなかったけれど、私は愛とは違う感情で…
ニンゲンとしての感情で…貴方に、お別れを言わせて…
ゴメン…教祖様……」

「くっ……私が…！」

「私は…あの人についていくの！」

バアアアアアアアア………アン

祭壇の間を包む威光の光から、無数の落雷が教祖の体に降り注いだ。

すべて終わった…立つのは最早雷に全身を打たれ生きてるかもわからないまま立ち続ける教祖と下院の二人だけ…

ジュリアは初めての覚醒ゆえか、同じように力尽きた黒い子竜の天使を抱いて意識を失っていた。

「グ……あ…はっ」

全身を火傷と炭化した肉に覆われた教祖の口から、黒い煙が咳と

共にあふれ出す。

教祖はもはや最後の力を振り絞り、下院と…愛しいジュリアを見る。

「……私の妄執から解き放たれたか、魔法まで……覚醒するとは、余程気に入ったらしい……」

「やはり、ジュリアを試して…いや、本当は覚醒することも知っていたな？知識の魔法で…」

下院の言葉に答える様子もない、最早教祖の体は足元から塵の用に細かい塩と化していくだけだ。
それが、神となった教祖の末路だった。

「幸せを掴め…我が娘のような……ジュリア……」

眠るジュリアの頬を撫で、教祖は塩の柱と化してその場に崩れ落ちた。

「娘のような…馬鹿を云うんじゃないよ」

下院は祭壇の間の天井を、それよりもまず上を向いて呟く。

「お前だって本当は、ジュリアの父親に成りたかったんだろうが…」

下院の囁きは誰にも聞こえることも、観測されることもなくただ…祭壇の間の反射だけが、その言葉を繰り返し呟いていた。

第四幕 契約 魔術師なりの…

「ねーねー下院さまー、いつになったら外出られるのー？」

「ふむ、とりあえずこの書類の山をどうかしないとどうにもな…」

ロンドンの薔薇十字騎士団本部にある下院の団長室は、とても下院本人には似合わないような壮麗な装飾が自慢である。

尤もその装飾の殆どは前団長の趣味だが、今やその団長室は机も地面も書類の山と化していた。

「そもそもこれは副団長の仕事のはずなんだがね、いったいどこへ行ったのやら… もうあれ退団とみていいのかねえ」

行方をくりましたまま連絡のつかない前団長にして副団長を思い出しつつ下院はため息をつく。

そもそも、薔薇十字騎士団は団員の管理がずさんすぎるのである。その性質上団員一人が一つ所にとどまることなどないし、せいぜいとどまるとすればここで情報を統制する団長と副団長のみである。

しかし副団長のグラディ「マクマートリー」も下院が団長となつてほんの一ヶ月で不意にどこかへと消えてしまい、ほぼ下院のみが本部でデスクワークに明け暮れているのである。

さらに下院は薔薇十字騎士団と兼用している副業がある、下院が市国に無理を言つて団長権限とその魔術の希少性にものを言わせて設立させた日本の魔術結社にして総合企業法人である O H 社だ。

そう、下院が本部を抜けられる機会など今回のようにどこかを襲撃するか、しばらく書類の山に埋もれる覚悟でサボタージュする時しかないのである。

元々この組織も勝手に動く周囲に世界規模の影響を及ぼす程のトラブルメーカーであるとある魔術師を団長と言う立場に縛りつけておくための物でもあったから仕方のない事なのだが…

そんな境遇にある下院を除いては、実は殆どが薔薇十字騎士団以外の魔術結社に在籍しているのだ。

それも団員が殆ど『薔薇十字騎士団に所属することで自らの組織を保護してもらう』という権利を欲する者や単に魔術師への復讐に燃える復讐鬼ばかりなのだ。

つまり…薔薇十字騎士団に所属していると判さえ押されていれば本来魔術結社に必要とされるイニシエイト―盟約儀式による一種の呪いじみた加盟認証―も行わないし、団長以外は基本的にフリーダムなのだ。

今本部にいる団員もたまたま資料を読みあさりに来たアルジェナと、元々この本部の本来の持ち主であるクロウリー家製のメイドであつた姉妹の計3人のみだろう。

・・・本来秘密結社である薔薇十字騎士団本部にふつうにジュリアがいるのも、その管理のずさんさによるものなのだが・・・

本部には結界が貼っており、一般人が何も知らずに進入してもただ空き家があるだけである。

そのためそうそう滅多に無関係な人間が本部に侵入しているということとはなく、ジュリアが誰かに見つかつても

「ああ、また知らない間に新入りが来たんだな」という程度の認識で済むことがほとんどだし、ましてこの時期だ。

ウェルダ教の襲撃から三日が経った今でも、通常の人々が住む世界と隔絶されている魔術界限とはいえ

その中でも大規模な宗教組織であつたウェルダ教が忽然と姿を消したという事実は少なからず一般人たちの話題に上ってしまった。魔術は表の界限に干渉する事をほかならぬ薔薇十字騎士団の力によつて禁じられている。

なのでそんな状況の中、やたら多国籍の怪しい集団が一つ所にとどまって怪しまれるわけにもいかず、薔薇十字騎士団の面子はそのまま慌ただしくウェルダ教跡の周辺都市を去りロンドンへと帰還していた。

しかし、当然慌ただしいとはいえ他の団員がジュリアの存在に気づかないはずはない。

「団長、なんだいそのガキは？」

ギクリと背筋を強張らせる下院と、闖入者を睨みつけるジュリア。その背後にはボンテージと三角帽子に身を包んだまさしく魔女らしい魔女、アルジェナが箒をもつてたたずんでいた。

「あ、あー…拾いました」

「犬猫か」

「この子は魔力を得る代償儀式として猫に変身する術を持っているし何時頃からついた癖なのか偶に「にゃあ」という事があるので、猫と言つのも正しいかもしれないかね」

「にゃあ？」

アルジェナはジュリアの純粋な瞳に見つめられ、うぐ…と一瞬唸ったのち、確かにと呟いた。

しかし直ぐに取り戻して下院と問答を繰り返す。

「しかしまさか団長、襲撃した結社の生き残りをかくまうなんてお涙頂戴なこと言わないよねえ？」

「そりゃあ偶には言っさ」

「あたし達あ泣く子もナイフで黙らせる薔薇十字騎士団よ？何処にそんな情があるというの」

「まあある時はあるだろう、人間なんだから」

「正直に言いなさい団長、その子魔法使いでしょう？」

「うん」

下院が最後の問いに応えると同時に、アルジェナは墓の先を下院に向ける。

「団長自らであろうと、勝手が過ぎれば許されはしないわよ？」

市国の馬鹿どもから勝手が過ぎれば殺せって『密命』が来てるの団長だって知ってるでしょう？

あたしだって団長は殺したくないのだけれど・・・？」

「下院様…っ！..」

止めようと動くジュリアの頭に手を置いて、下院はアルジェナに返す。

「ふむ…その密命は俺が魔法使いを味方につけるところなど基準はあるのかね？」

「それは詭弁ってわかってるの？」

「詭弁ですらない、苦し紛れの言い訳さね。」

下院はすう、と深呼吸を挟んではっきりと言いつつた。

「俺はこの少女を好きになった、一目惚れだ！」

だから義父に許可を貰い許嫁として、今は身寄りのなくなったジュリアを保護する！

表の世界から見てもこちら側からみても、当たり前のことではないかね？

それに…この子は未だ未覚醒だ、引き入れても文句は出ないし、団員として教育さえすれば覚醒しても問題はない…違うかね？」

はあ、とため息をこぼしたアルジェナは眉間を押さえ箸を下した。

「ハッスル爺の孫はロリコンか…血は争えないものねえ…解った、私からの報告書にはそう書いて送るから精々追加書類に埋もれなさいな」

「悪いな、今やってるのが丁度その書類だ」

そう言つて下院はトン、と書類に判を押した。

『ジュリア…ジュリア……』

(うるさい……)

『私の遺志を継ぐのだ、ジュリアア……』

(ジュリアはもう、あなたの道具じゃない…ッ!！)

『何が違つと云うのだ…』

(何が…?)

『彼奴もまた、お前が魔法使いだから…その能力と意味を求めて保護しているのではないのかアア?』

(そ…そんな…そんなこと、ないもん!！)

『選んだのだろう?』

(う…)

『選んだのなら受け入れるがいい、彼奴の所有物となつて、その身を開け渡し、思うがままに弄ばれるがいい』

(そんなことない…そんなことないもん…ッ!！)

『それが貴様の宿命、存在する意味だ!！!』

「ッ!！!！アア…ツ!！!」

悲鳴を上げながら、ジュリアは騎士団のベッドで跳ね起きる。

この処毎日のようにジュリアが見る夢は、教祖によって攻め苦しめられ続ける悪夢ばかりだった。

それこそ、それが想像の産物であることはよくわかっているつもりだった。

しかし毎日のようにそれが続けば、まるでそれが亡霊の声であるかのように明確な意思を持ってジュリアを苦しめ続けた。

『ジュリ…それは夢だ、夢でしかないんだ…』

ジュリアの頭の中に、今度は凜とした女性の声が響く。

彼女の名は天使メタトロン、ジュリが魔法使いの前兆としてその内に持った天使の魂から構築した人格、『上位自己^{ハイアーセルフ}』である。

通常上位自己は未覚醒な魔法使いの精神を保護するために、こういったトラウマや悪夢を管理する能力が備わっている。

しかしウエルダ教祖との戦いで一時的な覚醒を遂げ、簡易的な実体化を遂げた後はその能力も失っていた。

ほかならぬメタトロン自身、それを齒がゆく思っているのだらう。悪夢から覚めたジュリアをなだめるように声だけをかける。

「じゃあ、今すぐ私を魔法使いにしてよ…」

『ジュリ…』

ジュリアは枕に顔をうずめながら、実体のないメタトロンへ訴えかける。

「魔法さえ覚醒すれば、私が下院様を守れるんだ…下院様に忠実なだけの人形じゃなくなるんだ…」

『ジュリ…悪いがそれはできない』

「どうして…ッ!」

『魔法とはすなわち、英雄として選ばれた人間がその時になって発揮するものなんだ』

だから、今はその時ではないんだ…大魔力が圧倒的に少ないんだ』

「…っ」

『（それに、君は未だ未熟だ…君を選ぶ天使として、私は慎重に君を選ばなければならぬんだ…許してくれ、ジユリ…）』

それから数日もしないうちに、ウェルダ教の消滅は音を立てる事もなく人々の記憶から忘却されていった。

そこには市国を含む様々な情報操作もあったのだろう、それも常識の方法で。

その暗躍を証明するかのように、ロンドンの騎士団本部は普段各国へ赴いているような団員も含めた魔術師たちによって埋め尽くされていた。

「では、新団員ジユリア・F・ヘンデルの入団を祝して！！」

「………かんぱああああああい！！！！！！！！！！」

「んでいい加減グラディは解雇だあの野郎！！」

「……よくやった！！！！」

下院の号令で何回かの祝杯を挙げる約数十名の薔薇十字騎士団員。それぞれが法具級メカリスの能力を持った異能者や魔術師の集団だが、性質上その会合は荒くれ者のパーティに近い雰囲気を持っていた。

来る者は拒まず去る者は追わず、しかして去った後やりすぎれば元同僚であっても魔術師として全力で排除する。それだけが今の薔薇十字騎士団の掟である。

そう考えればただの荒くれ者達と言う表現がこの上なく似合う、ただ魔術が絡むだけの傭兵部隊と何ら変わらない。

「…」

しかし慌ただしい宴の中でもジュリアの表情は重く、何処か居辛さを感じさせるものだった。

それに気づいた下院は主催者席から立つとジュリアの手を引いて本部のベランダへとジュリアを連れて行った。

「ごめんなさい下院様… やっぱ、あの中ではしゃぐのは…」

「まあ、俺も含めウエルダ教を壊滅させた連中だからな…仕方ない。」

「

そのままベランダの柵に背を持たれ寄りかかる下院に、ジュリアは申し訳なさそうな目を向ける。

薔薇十字騎士団だけじゃない、自分は未だ下院をどこかで信用していないのかもしれない、ジュリアはそう感じた。

広い外の世界を見せてくれる人、どこか悲しい目をした人、魔法使いにすら怯まない最高位の魔術師…

しかし、下院という人間はいつもそれよりも遠くを見ていて…そこがどこか教祖に似た雰囲気を感じていた。

もしかしたら、この男もジュリアが魔法使いだから仲間に引き入れたのではないかと…

故にジュリアは我慢できずに下院に問いだした。

「なんで、ジュリアをあんな組織から助けたの？」

下院の目が、ジュリアだけを映した。
頬を赤らめながら、ジュリアは胸に手を充てて問い詰める。

「ジュリアが…魔法使いだから？」

ジュリアの意味も、魔力も、貴重な物だから？」

「…魔法使いだから、というのはあるかもしれないかね」

下院の答えに、ジュリアは涙を浮かべる…しかし

「…だが、貴重ではない物なんて本質的にはあり得ないのさ。
ジュリア、君が思っている以上に…この世界には様々な物と、生き物と、人と、意味に溢れている。

魔術師としては忘れてしまいがちだが、その意味の一つ一つは確実に自覚する以上に多く複雑に繋がっている物なんだ、それこそその概念が運命の糸とも呼ばれるくらいに」

「じゃあ…っ！…なんで！？ジュリアは魔法以外に持っているものなんて何もない…空っぽの人形なのに…」

「二つある、一つはジュリアが魔法使いだからだ

しかし魔法使いが貴重だからという話ではなく、俺は過去に二人の魔法使いと共に過ごし共に闘った事がある…」

しかし俺は二人とも守る事が出来なかった…考えうる最悪の結末を超えて、一人は俺が殺した、そしてもう一人は…壊れてしまった
だから魔法使いなんて宿命に縛られている人間は黙ってみていられない…罪滅ばしみたいなのかね」

そう言ってロンドンの冷たい月を見上げる下院の表情は、普段の

優しい作り物の笑みではない…辛辣な後悔を表情という形で刻み込まれているような、そんな表情だった。

「もう一つは…？」

「この前言ったかと思うんだがね？…じゃあ、今此处で済ませてしまおうかね」

そう言つと下院はポケットの中をまさぐつてジュリアの前に片膝をつく
そして取り出した物をジュリアの前に差し出す…それは小さい箱だった。

「これは…？」

「以前の契約の証…ってところかね？」

小箱を開けると、中には蒼い宝玉のついた髪留めが二つ入っていた。

それはある国では王の威光を現す護符の宝玉、下院が持ちうる最高の法具のひとつだった。

「一目惚れ、と言つことだ」

下院はジュリアに向けて恥ずかしそうな笑みを贈る。

「俺は君だからこそ生涯をかけて、君に様々な事を教え、守る事に決めたんだ
君は色々な物を知らずに育った、幸も不幸も、未来も意味も、愛さえも

それはそれだけ色々な物を手に持つ事が出来るということだ、だから何も持たない空っぽの人形なんかではないさ」

「下院さま・・・」

ジュリアの髪を櫛でとかし、二つの髪留めで留め上げる。

「そしてたくさんの物を手に入れたと思ったなら、その時は改めて指輪を贈らせてもらおうかね・・・」

それは婚約の儀式だった、花嫁に冠^{ティアアラ}を被せ、指輪を贈る約束を交わす。

しかしそこに魔術としての大きい意味はない、しかし下院のジュリアに対する誓いは伝えるに十分だっただろう。

ジュリアはわっと泣き出して、下院にしがみ付いた。

下院はそのままジュリアを抱きしめて優しく頭を撫でる・・・月ではなく、ジュリアを見つめながら・・・

幕間 グラディ＝マクマートリーの追憶

記憶の初めにこびりついたのは腐るような異臭だったと記憶している。

嗅覚は記憶の根底を刺激し録音する、当時魔香センスの知識もなかったであろう私であってもその事は自然と自覚させられていた。

気の遠くなるほど昔、英国の経済的成長と対をなすように生まれたスラムで私は育った。

父は居ない、物狂いとなって人の言葉も解さなくなった母だけが私の家族だった。

母は何故か酷く私を嫌悪し、それ故に私も母を殺してやりたいほどに憎んでいた。

何故私を生んだのか、何故私を嫌うのか、何故狂ったのか、何故理解しないのか、何故理解できないのか、何故理解しないのか、何故私がいるのか、何故父がいないのか、何故私は母を見捨てる事ができないのか、何故何故何故何故何故何故何故………

疑問は尽きなかった、その中で私を一際深い疑問に苛んだのは胸の内に宿る強い感情と、それを外郭として渦巻く何か…黒く、ひどく粘液質な感触だった。

私は数多くの疑問と、胸中の不気味な感触にただひたすら耐えながら、道行く人々に金をせびり、どぶ鼠を捕まえ食い蛆さえ貴重なタンパク源だった

人間として生きるべき意味を忘れ、ただ本能のま^{イト}まに生き続けた。

「そんなところで何をくすぶっているのかね？」

見上げた先には、手があった。

「人生を無駄にしすぎている、君はここに在るべき人間ではない」
差し伸べられた手、握るために差し出された手。

「勘違いをしてはいけない、君はここに居るべき人間ではないが、同時にここに居る事を選択する余地がある」

溺れる者は藁をも掴む。

「私は君に、名と、知識と、名誉と、人生と、真実を与えよう」

これで私の疑問も、気持ち悪い感触もなくなるのなら…

「代わりに、君は死さえ生温いという思いを抱くだろう」

かまわない、それで私の望みがすべて叶うなら…

「君に、幻想を壊す覚悟なんてあるわけないだろうに」

母は、私の本当の母ではなかった。

身分違いの恋におぼれ、立場を落とされることを恐れた男に逃げられ、赤子も生む前に殺された

そうして壊れた心でどうにか失われた愛を求め続け、他人の幸せを盗んだ…それが私だった。

「憎いかね？」

憎くはない

「悲しいかね？」

悲しくはない

「では、君の胸中に渦巻くその塊は何かね？」

これは、ありえたかもしれない私の可能性…腐臭の中で腐り溶けた『こんなはずではなかった』私の意味。

「その外郭の正体は…」

それを包むものは感情なんて綺麗なものではなかった。
生まれてから今まで私を突き動かしてきた無数の疑問、疑問は回答を欲する。

獣のようであり、獣では持ちえない私だけの本能：無限の欲望《G
a n ? n c i a - 0 0 》。

「ようこそ、グラディ＝マクマートリー」

名を与えられた獣は、母だと思っていたものの死骸の上で産声を上げた。

「今日から君は魔法使いだ」

私を闇へ突き落した男の名はアレイスター・クロウリーといった。
歴史上に名を残す稀代のペテン師うくてなしのこうかんまという認識は、合ってもいたし間違ってもいた。

現に魔術は存在し、彼は魔術師だった。非常に歪んでこそいたが……
しかし行った数々の魔術的実験は多くの人間の人生を無残にも凌辱し、歴史上に残ってしまった事件も少なくはない。

その結果彼は”市国”に目を付けられ、彼を監視するための鎖として薔薇十字騎士団なる組織を興しほぼ強制的に彼をその長とした。

薔薇十字騎士団はそんな彼にとって素晴らしい実験環境だった。

なにせ敵には事欠かない、なにより兵器扱いされているとはいえず実験を合法的に行っても良いとされる事は彼にとって至上の喜びだった。

代わりに歴史上においてのアレイスター・クロウリーは市国によってとてもつまらない終わり方をしたということにされてしまったが…

アレイスターは言っていた、知恵とはセフィロトの木にぶら下がる林檎のようなものだ。

赤ん坊は知識インポートの吸収がない限り精神活動を行うことができないようにそれに与えられる水は木に与えられる栄養分として蓄えられ、やがて知恵の実魔法という形で発現する。

過去現れた預言者の10権能である魔法使いはまさしくそれだ、自然界の理を作り魔法という名の奇跡を創造する彼らはまさにセフィロトの果実そのものだ。

彼の夢は新しい魔法を創造する事だった、そのための知識を蓄えるためなら何でもやった。

しかし本当に彼は飽きてしまったかのようにあっけなくこの世を去った、まるでもつと面白い物をあちらの世界に見出した子供のように。

体だけをうっかり落つことしたかのように唐突に。

最期は実の子孫にも、その魔術のごく一部を継承した私にも看取られることなく。

私の欲望は彼の家族よりも膨大な量に至るまで、彼の知恵を呑みこんでいた。

蛇である彼に誘われた獣のように、そして必然のように最悪の魔術師の称号とともに私が薔薇十字騎士団の長となった。

私は狂喜した。

彼の膨大な量の人生を私が喰らったのだと実感できた。

生まれて初めて満たされたような気がしていた、ようやく私は獣から人間へ昇華する事ができたのだと

そう錯覚していた。

やがて無能な奴の子の実験によって生を成し得た、奴の孫の手によって…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2655/>

マルクトマルコ外伝 魔法少女ジュリア

2011年11月15日13時57分発行